

日本の聖書翻訳の歩みと青山学院



大学名誉教授 元学院宗教部長
大島力
OSHIMA Chikara

2018年に日本聖書協会から新しい日本語訳聖書『聖書 聖書協会共同訳』が発行されました。そして、2021年度から青山学院はこの新訳聖書を採用し、学院の式典・諸礼拝、また各設置学校の聖書科・キリスト教概論等の授業で使われています。これは全国のキリスト教学校の中ではかなり早い時期の導入であったと言えるでしょう。私は、今回の翻訳事業に原語翻訳担当者として関わりをもっていたので、このことを大いに喜び、新訳聖書の「聖書の言葉」が学院に関係する方々にさらに親しまれていくことを願っています。そこで日本の聖書翻訳の歩みと青山学院の関わりを、その後の展開を振り返ってみたいと思います。

「明治元訳」（一八八七年）

そもそも旧約聖書（原文はヘブライ語）と新

至る過程に、青山学院は密接な関わりをもっていたのです。

「大正改訳」（一九一七年）

とりわけ別所は改訳委員会の書記を務めており、「大正改訳」に関わる「聖書改訳委員会記録」と「改訳聖書原稿校本」は別所自身により、現在の青山学院資料センターに寄贈されています。これは「明治元訳」から「大正改訳」に至る改訳過程を知るための第一次資料であり、現在、資料センターで一括管理されています。学内外の研究者はこれを利用して聖書の訳語の变化を探る研究対象としています。

「大正改訳」の仕事は1910年から1917年にかけて行われました。会場は当時の青山学院神学部の3階の一室でした。日曜日を除き毎日午前9時から午後4時まで委員たちは訳業に従事しました。そうしてマルコによる福音書の初稿ができ上がり、推敲を経て、広く意見を徴するため試訳として1911年に印刷頒布されました。

この試訳は「明治四十四年改譯 マコ福音書」と題され、本多と星野の連名による「改譯 マコ福音書に序す」という序文が記載されています。明治44年と言えば本多逝去の前年であり、本多の晩年の仕事のひとつが、聖書翻訳であったことが分かります。7頁に亘る序文の冒頭には以下のように記されています。

約聖書（原文はギリシア語）がすべて日本語で読めるようになったのは1887年のことです。明治初期に日本に来ていたプロテスタント教会の宣教師が中心となり、日本人の牧師たちの協力も得て、聖書常置委員会訳「旧新約全書」が発行されました。その訳業で終始、中心的な役割を果たしたのは有名なJ・C・ヘボンでした。もちろんその他多くの人々の協力があり、後に青山学院の初代院長となるロバート・S・マクレイは、メソジスト教会を代表してこの事業に参画しています。この翻訳聖書は「明治元訳」と言われています。

しかし、1900年以降、日本語の変化、また参考とされた英語の欽定訳聖書が1885年に改訳されたことなどにより、日本においても「明治元訳」の改訂の必要性と機運が高ま

「聖書がたゞ其國語に翻譯せられたる國に於いては、その後幾何もなく之が改譯の舉あること實に止むべからざるものなり。これは一方に於いてその國語に變遷あると同時に、他方に於いて聖書解釋に関する智識に進歩あればなり。」

このことは現在も全く変わらないことです。聖書は常に当該の母国語の変化と聖書学的知見の深化に伴って、改訳されていくべき書物なのです。

「マコ福音書」（一九二一年）の意義

この「マコ福音書」の発行は、「明治元訳」の改訳が以前より求められていただけに大きな反響をよびました。改訳事業の主導権はまだ宣教師たちにあったのですが、日本人が正規の委員として最初から加わったことは注目すべき事実です（歴史学者海老澤有道氏の指摘）。事実、富士見町教会牧師の植村正久氏は「今まで出来た翻訳中で最も優れたもの」であるとして高く評価し、マルコの簡潔な文体をよく表し、しかも平易で読みやすく、「日本語の日本語」として及第点を与えています。ただし、「マコ」はやはり原語の発音に近い「マルコ」がよいと指摘しています。事実、1917年に『改訳新約聖書』が発行された時には「マルコ福音書」に改められました。

いずれにせよ1911年発行の「マコ福音書

てきました。そこで日本のプロテスタント諸教派の親睦組織である福音同盟会では、まず聖書改訳の特別委員を本多庸一と星野光多に委嘱し、宣教師および米国、英国の聖書会社との折衝と改訳委員選定にあたらせました。その結果、D・C・グリーン、C・K・ハーリントン、H・J・フォス、C・S・デヴィソン、藤井寅一、別所梅之助、松山高吉、川添万寿得らによって改訳の作業が始められました。この「明治元訳」の改訳に、日本人最初の本学院院长である本多庸一が重要な役割を果たしていたことは銘記されるべきことでしょう。また本学教授であった別所梅之助が改訳委員として関わっていたということも重要な事実です。後にこの改訳された新約聖書は「大正改訳」と呼ばれるようになりますが、その作業の初期から完成（1917年）に

「聖書は、『明治元訳』から始まった日本における本格的な聖書翻訳の事業が、さらにギリシア語原典に基づいてなされ、また日本人自身の手によって分かりやすい「日本語の日本語」として練られていく過程に位置する「大正改訳新約聖書」のパイロット版です。その発行にも引き続き青山学院が人的に深く関与し、また具体的な訳業の場所としても貢献していたことは、記憶に留めておくべきことでしょう。」

「口語訳」（一九五五年）「新共同訳」（一九八七年）

1945年の敗戦後、1955年に「口語訳聖書」が発行されます。この新約聖書の部分の翻訳作業は3年間という短期間でなされました。それは当時の時代の必要に迫られてのことであり、翻訳委員は他の仕事を辞して、これに専従しました。委員は、松本卓夫（委員長）、山谷省吾、高橋虔の3名でした。その筆頭に挙げられる松本卓夫は、長く本学神学部で教授を務めた新約学者でした。さらに、1987年に発行された「新共同訳聖書」の旧約部門編集実務委員の一人は、本学文学部神学科で教え、後に立教大学に移った旧約学者木田献一でありました。このように日本の聖書翻訳の歩みに、青山学院は深く関わっています。このことは学院創立150周年を迎えるにあたり、21世紀半ばになされるであろう次の聖書翻訳に、本学が大きく貢献できるというヴィジョンを抱かせます。